

音源の位相チェック実験(20)
—ハイレゾ音源再生における確認(4)—

1. はじめに

前報(19)に引き続き、ハイレゾのファイル音源について同様の検討を行っていきます。

2. 音源の位相チェックの試聴方法

今回は、Universal Music 扱いの MQA-CD 音源を対象にします。MQA-CD は fidata HFAS1-S10 にリッピングしています。

再生ルートは次のとおりで、fidata HFAS1-S10 から USB 経由で Brooklyn DAC+ に送信します。このような再生方法で MQA のデコードが可能なことは確認済みです。

fidata HFAS1-S10→Brooklyn DAC+→P&G フェーダー→BACU-2000
→300B シングルアンプ

今回の対象音源は次のとおりです。対応するアナログ盤がある場合は、LP-12 あるいは Garrad401 のシステムで比較試聴します。

Universal Music UCCG-40079/89 MQA/UHQCD

R. シュトラウス 交響詩《ツァラトウストラはかく語りき》第 1 曲夜明け他
ヘルベルト・フォン・カラヤン指揮ウィーンフィル他

Universal Music UCCG-40072 MQA/UHQCD

モーツァルト レクイエム
カール・ベーム指揮ウィーンフィル

Universal Music UCCG-40005 MQA/UHQCD

ブルックナー 交響曲第 4 番《ロマンティック》
カール・ベーム指揮ウィーンフィル

Universal Music UCCG-40007 MQA/UHQCD

マーラー 交響曲第 5 番
ゲオルグ・ショルティ指揮シカゴ交響楽団

Universal Music UCCG-40071 MQA/UHQCD

モーツァルト 交響曲第 40 番・第 41 番
カール・ベーム指揮ベルリンフィル

Universal Music UCCG-40078 MQA/UHQCD

ドヴォルザーク他 チェロ協奏曲ロ短調作品 104 他
ムスティスラフ・ロストロポーヴィチ (チェロ)

ヘルベルト・フォン・カラヤン指揮ベルリン・フィル
Universal Music UCCG-40010 MQA/UHQCD
ブラームス ピアノ協奏曲第2番変ロ長調作品83
ヴィルヘルム・バックハウス (ピアノ)
カール・ベーム指揮ウィーンフィル

3. 音源の位相チェックの試聴結果

今回は、いずれも Universal Music から提供された MQA-CD をリッピングして fidata HFAS1-S10 から USB 経由で Brooklyn DAC+ に送って再生していきます。そして Brooklyn DAC+ の位相反転を行いながら比較していきます。

Universal Music UCCG-40079/89 のクラシックのサンプルは、マルタ・アルゲリッチ (ピアノ) ・クラウディオ・アバド指揮ロンドン交響楽団のショパンのピアノ協奏曲第1番ホ短調の第3楽章を聴きましたが、Brooklyn DAC+ で位相反転させた方が、ピアノの切れがよく、オーケストラの定位もしっかりしてきます。

Universal Music UCCG-40072 のモーツァルトのレクイエムは、Brooklyn DAC+ で位相反転させた方が、合唱の分離と協和がよくなり、このようなスケールの大きい曲の醍醐味が伝わってきます。

対応するアナログ盤のドイツグラモフォン 470 8517 は、RIAA の正相から聴き始め、合唱の分離の点から逆相にし、イコライザーカーブを切り替えて、TELDEC が明晰になることから採用し、第4時定数は響きを豊かになる点で Mid を採りました。すなわち、MQA もアナログ盤も逆相という結果です。

ドイツグラモフォン 470 8517

モーツァルト レクイエム

カール・ベーム指揮ウィーンフィル

Universal Music UCCG-40005 のブルックナーの交響曲第4番は、Brooklyn DAC+ で位相反転させた方が、定位がよくオーケストラの各パートの音像はしっかりたってきます。

対応するアナログ盤の LONDON の SOL1003-4 では、フォノイコライザー Model 120 の活用(18)において TELDEC の逆相で第4時定数が High ということになっています。すなわち、MQA もアナログ盤も逆相という結果です。

LONDON SOL1003-4

アントン・ブルックナー交響曲4番変ホ長調

カール・ベーム指揮ウィーンフィル

Universal Music UCCG-40007 のマーラーの交響曲第5番は、Brooklyn DAC+ で位相反転させた方が、定位がしっかりして、オーケストラの音の分離が明瞭になってきます。

Universal Music UCCG-40071 のモーツァルトの交響曲第 40 番・第 41 番は、Brooklyn DAC+で位相反転させた方が、定位がしっかりし、全般に騒がしさが解消します。

Universal Music の UCCG-40078 のドヴォルザークのチェロ協奏曲は、Brooklyn DAC+で位相反転させた方が、定位がよく、チェロの音に滲みがなく音像がしっかりたってきます。

対応するアナログ盤のドイツグラモフォン MG-2118 は、Model 120 の TELDEC の逆相で第 4 時定数が High もしくは Mid が良さそうですが、一応 Mid にしておきます。すなわち、MQA もアナログ盤も逆相という結果です。

ドイツグラモフォン MG-2118

ドヴォルザーク チェロ協奏曲 短調作品 104 他

ムスティスラフ・ロストロポーヴィチ (チェロ)

ヘルベルト・フォン・カラヤン 指揮 ベルリン・フィル

Universal Music UCCG-40010 のブラームスのピアノ協奏曲第 2 番は、Brooklyn DAC+で位相反転させた方が、バックハウスのがっちりした構成のピアノリズムが明瞭に捉えられますし、オーケストラの音の分離も定位も改善されます。

対応するアナログ盤の LONDON (キングレコード) は、TELDEC の逆相の第 4 時定数は High か、DECCA の逆相の第 4 時定数は Mid かというところですが、ピアノの音のリアリティで一応後者にしておきます。すなわち、MQA もアナログ盤も逆相という結果です。

LONDON (キングレコード) K20C 8677

ブラームス ピアノ協奏曲第 2 番 変ロ長調 作品 83

ヴィルヘルム・バックハウス (ピアノ) ・カール・ベーム 指揮 ウィーンフィル

4. まとめ

今回試聴した Universal Music 扱いの MQA-CD 音源は、すべて Brooklyn DAC+で位相反転させた方が良いという予想外の結果になりました。また、対応するアナログ盤も逆相の方が良いという結果になり、MQA-CD 音源と一致しました。

Universal Music 扱いの MQA-CD は、アナログマスターから SACD 用に 2.8MHz DSD にリマスタリングされ、さらに 352.8KHz PCM の MQA フォーマットに編集されたものということですが、どのようにして逆相になったかは不明です。

以上